論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	塩田　藍

		職　位　・学　位	氏　名　　印
論文審査担当者	主　査	慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科教授・同研究科委員・博士(国際公共政策)	堀田　聰子
	副　査	慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科教授・同研究科委員・理学博士	渡辺　美智子
	副　査	慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科教授・同研究科委員・博士(医学)	金子　仁子
	副　査	慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科教授・同研究科委員・博士(医学)	山内　慶太

（論文審査の要旨）

塩田藍君提出の学位請求論文『地域在住精神障害者の Community integration に関する研究』は、地域在住精神障害者の Community integration（地域生活共生感、以下 CI と記す）の向上に資する為に、CI の実態を明らかにすると共に CI に影響する要因を明らかにしようとするものである。

日本では、精神障害者の入院治療から地域生活への移行の必要性が繰り返し指摘され、様々な施策が打ち出されて来たが、十分には進まないままで今日に至っている。その状況を打開する為には、精神科病院の退院促進と共に地域生活環境の更なる整備が求められるが、それが実効を得る為には、障害者自らの主観的な CI の向上に資するように留意する必要があろう。実際、欧米諸国では障害者の地域生活の目標の一つにも掲げられているが、日本では殆ど着目されてこなかった。

本論文は、主に４つの研究からなっており、以下の４つの章と「総括」の章で構成されている。

第１章「精神障害者における Community integration の研究動向」では、精神障害者における CI に関する概念、要因、研究動向等を整理するために、先行研究を精査し、以下の諸点を指摘した。即ち、①概念が十分に定義されないまま用いられていること、②信頼性と妥当性が検証された尺度とそれを利用した実証的な研究が少ないこと、③CI に影響する要因については、臨床的な視点が中心で日常の生活実態を反映する要因が検討されていないこと、④要因間の関連について検討されていないことである。なお、この①では、先行研究で取り上げられている CI の構成要素が、研究によって単次元と二次元があり、単次元の場合には、主に適合、サポート認識、充実感、自立の主観的要素で形成されているのに対して、二次元の場合には、この主観的要素とサービス資源利用量等の客観的要素で構成されていることを示し、客観的要素が CI の要因と重複するものであることを指摘している。

第２章の「日本語版 Community Integration Measure の開発」では、第１章を踏まえて、CI を主観的要素で構成される単次元概念と定義した上で、海外の地域在住精神障害者に使用されている尺度である CIM: Community Integration Measure の日本語版を開発し、その信頼性と妥当性を検証した。尺度翻訳の一般的な手順に従い、原著者の許可を得た後、原版の翻訳・逆翻訳、精神障害者や精神保健等の専門家による翻訳内容の確認を経て、地域在住精神障害者で調査を実施した。この結果から，日本語版 CIM は原版と同様に一因子構造の信頼性と妥当性を有する尺度であり、地域在住精神障害者の CI の測定が可能であることを確認した。

第３章の「地域在住精神障害者の生活実態に基づく支援の類型化」は、地域在住精神障害者の生活実

論 文 審 査 の 要 旨

態に基づく特徴と支援の必要性を明らかにすることを目的に、潜在クラスモデルを用いて探索的に類型化を行った。その結果、基本属性、サービスの利用内容、ソーシャルネットワーク、CI、地域生活自己効力感等で５つの類型に分けられることを示した。また、CI の評価がもっとも高い類型とその他の類型では、ソーシャルネットワークのサイズが有意に異なることから、ソーシャルネットワークが地域在住精神障害者を層別するために有用な属性であることも示唆された。

第４章の「地域在住精神障害者における Community integration の要因の検証」では、CI の要因を明らかにすることを目的に、地域活動支援センター等の通所施設を日中の活動場所としている精神障害者を対象に CIM をはじめとする設問で構成される質問紙で調査を行った。決定木分析の結果，地域在住精神障害者はソーシャルネットワークのサイズで示される社会的孤立傾向で層別された。これを踏まえて、因果モデルを多母集団同時分析で、構造モデルを層ごとの重回帰分析で検討した結果、社会的孤立傾向により CI の因果モデルと構造モデルは異なることを明らかにした。その結果から、社会的孤立傾向の低い群では、家族や友人によるソーシャルネットワークを基盤として、インフォーマルケアを活用する支援の有用性を、社会的孤立傾向の高い群では、精神障害者自身で管理せざるを得ない生活行動をアセスメントし、フォーマルケアを活用する支援の必要性を指摘した。

本論文は、主に以下の点で評価できる。

① 我が国の障害者の地域生活に関する研究で殆ど着目されて来なかった CI に焦点を当てた先駆的な研究である。第１章で欧米の先行研究を丁寧にレビューしてその概念を整理しているが、先行研究は、CI を単次元概念で定義しているものと多次元概念で定義しているものがあり、後者では、主観的要素とそれに影響する地域サービスの客観的要素が混在していることを指摘したことも重要である。本論文でも、それを踏まえて、CI を主観に基づく単次元の概念と定義したことで、要因の分析等も可能にした。

② 主観に基づく単次元の概念として、障害者自身が自己の生活を、適合、サポート認識、充実感、自立の４つの要素に注目し日本語版 CIM を開発したことで、実際にアセスメンできるようにした意義は大きい。しかも、本論文では尺度の開発のみで終わらず、更に、実態を類型化し、その知見を踏まえた調査で CI の要因の検討を進めたことも評価される。

③ 特に第４章において、対象の特性を主観的に層別するのではなく、計量的に変数間の連関から二つの層を明かにし、更に因果をモデルベースで考察している。その結果、社会的孤立傾向の高低によって、構造モデル、因果モデルが異なるという、今後の支援を考える上でも有益な知見を得ることが出来た。この知見に至る過程で、高度な計量的分析手法を適切に駆使した分析能力は高く評価される。また、第３章では、同様の地域サービスを受けている精神障害者に潜在クラス分析を用いて類型化を行っているが、従来の精神医療が患者・障害者の類型ではなく施設類型で機能分化を進めようとしながらも、患者・利用者の実際の類型と対応しておらず機能分化が進まないできたことを考えると、幅広く応用の期待できる方法論であると思われる。

④ 今まで定訳がなかった Community integration について、本研究を総括して、新たに邦訳として「地域生活共生感」を提案していることも評価できる。「共生」という言葉自体は近年、使用が増えているきらいはあるが、精神障害者については従来余りなく、また地域生活といっても、自宅や居宅施設にこもる傾向が強いことを考えても、本来の CI の趣旨をより反映する価値ある提案であると考える。

⑤ 本論文では巻末に付属資料として、調査協力施設の職員への「フィードバック資料」、利用者への「フ

論 文 審 査 の 要 旨

ィードバック資料ポスター」が添えられているが、結果を可視化するための工夫が優れている。特に、利用者向けのポスターは、結果をわかりやすく且つ啓蒙的に伝えるデザインであり、論文の本体を構成するものではないが特記できる。

以上のことから、本研究は、地域在住精神障害者のCIの先駆的な研究であると共に、地域在住精神障害者の支援の向上に寄与し得る意義ある研究であると高く評価できる。加えて、本研究が、障害者本人が主観的に感じている地域での自己の生活のありようからCIに留意しながら支援の仕組みを考えるというのは、価値のある認識であり、今後の展開が期待できるものである。

なお、質疑においても、以上の内容を中心に討議がなされたが、極めて周到な準備の下に、的確な回答なされた。その中で、本論文に質的な研究が含まれていないことについて、実践への示唆が一般論に陥る懸念がないかとの指摘がなされたが、これに対して、元々自治体保健師としての実務経験の中での問題意識から発展した研究であること、各調査の段階で、障害者本人や職員にインタビューを行いながら研究を進めて来たこと、第4章の結果を各協力施設にフィードバックした際にはアンケートも行っており、今後それを基に実践へのより具体的な提言を行うことを計画していることが説明された。また、本研究の精神障害者以外の分野への応用についても質疑がなされたが、もともとCIMが、脳外傷者を対象に開発され精神障害者等にも応用されて来たものであって、汎用性が高いものであり、今後地域在住の単身高齢者等の調査分析等にも広げて使用したい旨の回答があった。

本学位請求論文は、上記のように高い評価を以て、審査担当者は一致して、塩田藍君に博士(医療マネジメント学)の学位を授与することが適当であると判断した。